

「世界日本研究者フォーラム 2009」

公開シンポジウム

～変わりゆく日本研究：世界の現場からの報告～

2009年10月15日（木）14：30-17：00

国際交流基金本部（2F さくらホール）

国際交流基金は、世界各国・地域の日本研究界で中核的な役割を担う日本研究者16名を招いて、各国・地域における日本研究の現状について情報を交わし、今後の課題を討議するために、10月12日から3日間にわたる非公開会議を催した。

この公開シンポジウムは、非公開会議における報告および討議のエッセンスを広く紹介し、日本における研究者・有識者の視点も交えて一層議論を深めるべく、実施されたもの。

セッション1：各国・地域における日本研究の現況

【報告】楊棟梁教授（中国/南開大学）

昨年中国で実施された全国調査によると、世代交代が進んでいることが明らかになった。60歳代以上の研究者が減少し、代わって80年代卒の研究者が中心となった。また、学問分野は多様化し、昔と比較してレベルの高低は不明ながら日本に関する知識は増加した。米国でも同様の傾向が見られる。

学者の分布は、40%が言語学、30%が人文科学、30%が社会科学である。一方、欧州での日本研究の中心は人文科学である。

中国での日本研究の変遷に関し、以前は日本の成功体験に習う側面が大きかったが、現在は日本の失敗からも学ぶという姿勢である。また、日本研究者のみならず、他分野の学者や一般の人々も日本研究に参入を始めた。これはインターネット普及の影響が大きく、日本研究者にとって多くの課題を提起している。研究者間の交流があまりないため、情報交流やネットワーク形成が課題となっている。

米国においては、日本研究の国際化、研究者の世代交代、若い研究者の日本語能力向上等の内的変化がみられた。外的変化としては、ITの普及があげられ

る。過去 50 年の間に①言語・地域研究 から②政治経済競争へ、さらに ③文化研究へと、研究領域のバランスが変化した。また、質・量の向上も顕著。

中国及びインドの発展が日本研究に与える影響は現時点で不明である。基金は世界の日本研究者の仲介役としての役割が重要である。

【コメント・討議】

(野村彰男／朝日新聞社ジャーナリスト学校長) 世代交代が進んでいるのは心強い。中国は日本の成功例のみならず失敗例からも学んでおり、日本研究が盛んであることに安堵。

(芳賀徹／京都造形芸術大学名誉学長) 日本研究者の連帯の仲介役として基金の役割は重要である。

(アンダーソン／豪) 世界全体のネットワーク形成は重要だが、一気に構築することは難しい。豪州と東南アジア、欧州と米国は緊密なネットワークを構築しているが、2か国間・2地域間からネットワーク構築に取り組んではどうか。

(フース／EAJS) ヨーロッパ日本研究協会には米国から来た日本研究者が多く在籍している。欧州とは異なる視点から新しい研究成果が生み出されている。

(ハムザ／エジプト) 中東の日本理解が必要といわれているが、これは日本の文化政策によっても影響を受ける。中東においても日本研究者学会の設立が必要である。

(スタインホフ／米) 欧州と米国の日本研究者の交流は、以前は日本を経由して行われていた。現在は直接情報交換が行われている。

(芳賀) 日本研究でもグローバル化が進んで、国籍を問うことがなくなったことも一因であろう。

(プラサーテュスクス／タイ) タイにおいては、以前は経済を中心に日本研究が進められた。現在は、日本が経験している課題（青少年問題、環境問題等）の研究が盛んである。

(楊棟梁) 80年代までは「日本を見習う」研究が多かった。現在はバブルとその崩壊や 55 年体制崩壊の理由などの研究が盛んである。(日中関係を研究する

に当たり、現在も基礎研究が最も重要といえるかと問われて、) 然り。

セッション2：地域研究と日本研究

【報告】Veronica TAYLOR 教授 (米国/ワシントン大学)

アセアン諸国を代表して、タイの日本研究の発展（1980年から1997年にかけての国際交流基金などの助成、タマサート大学日本研究センターの設立、学際的な地域研究の典型となった現在の日本研究）についての報告があった。これに対してヨーロッパから、言語学と人文科学をベースとする日本学、いわゆるジャパノロジーが盛んなヨーロッパの事情が紹介された。全体に、日本研究は各国で成熟してきており、日本研究が地域研究に含まれるか否かに必ずしもこだわる必要はないと思われる。

しかし、議論を始めると、新たな課題がたくさん出た。ここではそのうち以下の4つについて述べたい。

①国レベルでの格差

日本研究の状況が国によって大きく異なっている。韓国では約700人の日本研究者がいて、30以上にのぼる日本関連の学会がある一方、例えば中国と南米では日本語と日本研究が急速に広がっているにも拘らず、教育インフラや資源が特定の大都市に集中しているため、日本研究の発展が妨げられている。

②社会科学から人文科学への変移

景気低迷による日本の影響力低下に伴い、日本の政治経済に関心を持つ若い学者も減少。それをうけて日本研究のパラダイムが変わり、学生の需要がポップカルチャーに移りつつある。結果として、社会科学分野の日本専門家の人数は少なくなっている。時代の移り変わりといえればそれまでだが、今まで学際的研究の核となっていた社会科学が人文科学にとってかわられると、学際的な日本研究の発展にとってはマイナスではないか。

③日本研究とアジア研究

日本研究をアジアの地域研究に関連づけてとらえると、歴史的認識、領土問題、貿易、人口移動、安全対策、社会変化、環境問題などの共通課題を考える必要がある。社会科学はその分析の土台となるべきものであり、必要性は明白。中国、韓国、日本を簡単に東アジアという一つの地域として扱うことにも問題があるが、その指摘にも社会学的なアプローチが必要だろう。

④地域レベルでの日本研究ネットワークの発展

最近、タイにおける日本研究学会に加えて、アセアンにおける日本研究学会（JSA-ASEAN）が発足した。また、アセアン学会がオーストラリアの JSAA と協力して、二年おきに東南アジアとオーストラリアで共同学会を開催している。こうした国境を越えた、地域と地域をつないだ形の共同活動は日本研究にとって意義深い。自発的な日本研究のグローバルネットワーク作りの大事な一歩になるかもしれない。

これらの課題を危機とみるか、チャンスとみるかは人によって意見が分かれるだろうが、フォーラムでの議論から、日本研究が分野、国境、そして時代を越えて多様で活気がある学問に成長してきたことがよくわかった。そして国際交流基金がそれを支え続けてきたことも再認識した。これからは各国の状況をより正確に把握し、日本研究を分野としてどのように発展させるかを考えていくことが、日本研究者と国際交流基金双方のチャレンジとなるだろう。

【コメント・討議】

（野村）日本研究の関心分野がポップカルチャーに向いていることにつき、日本研究者はどう思われるか。

（田中／墨）メキシコでもアニメをきっかけにして日本語・日本研究を志し、修士・博士課程に進む学生が多い。映像資料を使って優れた研究をする学生もいるので、教授陣もこれまでの文献中心の研究だけでなく、こうした新しい動きに対応できる能力を身につける必要がある。

（クライナー／法政大学特認教授）日本研究のもうひとつのパラダイムとして、「ものを通じた日本理解」がある。博物館の日本美術コレクションの活用などが考えられる。大学に博物館も含めた日本研究サミットを開いてはどうか。

（楊曉捷／加）カナダでは日本語学習者数が中国語学習者数を上回っているが、アニメも日本語学習者数増加の一因。カナダでは、日本を専門とする研究者の数は少なく、各分野の専門家が「日本」をキーワードにして集まっているのが現状である。

（徐／中）アニメは茶道等の日本の伝統文化より入りやすい。ただ、アニメ・マンガにとどまると学生の日本理解が表面的なものにとどまる。そこからどう深化させるかについては、日本研究者の指導が大事である。

(ハムザ) 国際交流基金がエジプトに漫画家の永井豪氏を派遣したと聞く。アラブ世界にもマンガは入ってくるが、仏語訳から紹介されることが多く、誤解を招くこともある。前提となる日本についての知識が必要。

(サカイ/仏) 仏では日本のマンガのマーケットシェアは大きい。これはグローバル化現象であり、日本に対する興味を支えている。日本研究の分野もそれにつれて新しい分野を開拓する必要がある。

(スタインホフ) 文化研究としての日本研究はすでに存在している。アニメから日本研究に入る学生は、アニメがすでに自らの文化の一部になっていることから、日本を近い存在としてとらえる。

セッション3 「アジア研究と日本研究」

【報告】 Franz WALDENBERGER 教授 (ドイツ/ミュンヘン大学)

研究分野や国の違いを反映したさまざまな視点が議論された。アジア研究と日本研究というテーマの背景には、インドや中国などの新興国の経済的な台頭により、日本に対する関心が薄れ、その結果として日本研究の重要性も低下してしまうのではないかという懸念があった。

今日、多くの国々において、日本よりもアジアという名称を使った方が、より幅広い層の関心を集められることは確かである。そのため、特に各国の大学は、日本研究や中国研究、韓国研究などを合併して、アジア研究という名称のもとに組織化する必要性を感じている。アジアを前面に出すことで、より大きな注目を集め、大学が公の関心にきちんと答えていることを証明できる。

しかし、アジア研究の名の下に日本研究を組織の面で再編した場合でも、日本研究の内容と量的なウエイトに深刻な影響が出ることはほとんどない。この点については、インドとオーストラリアの報告者が発表し、その後のディスカッションでアメリカ、中国、韓国、ヨーロッパの代表によっても確認された。

アジアブームの中で「日本研究の競争力」が維持できた理由がいくつか指摘された。一つは、日本研究には長い歴史があり、すでに確立された研究分野になっていること。例えばオーストラリアでは、日本はすでに主要な、つまりメインストリームの教育科目や研究分野になっている。中国、インド、韓国、東南アジアに関する研究は、世界中のどこでも日本研究ほど幅広い範囲での研究活動がまだ行われていない現状がある。日本研究はすでに、国際的かつモビリ

ティの高い研究者からなる大きなコミュニティによって支えられている。その他にも、国や地域レベルで日本研究者の組織や協会があり、国内のみならず国際会議も定期的開催されている。また、PhDプログラムも多数用意されている。

もう一つ重要なのは、日本に対する関心、特に若い世代の関心が世界的にこれまで以上に高まっていること。ただし、日本に対する関心の内容そのものは大きく変化した。以前は日本というと政治や経済が中心だったが、最近の若者を魅了しているのは日本のポップカルチャーである。こうした新規ニーズに今後の教育と研究をどう対応させていくかが新たな課題となる。

研究者の視点から見ると、アジアブームによって、日本の経済や政治に対する関心が低下するという心配には根拠がない。むしろ逆に、日本は経済や政治の面でも相変わらず興味深い研究対象になる。

日本はアジア諸国にとって重要な参考モデルであるため、日本研究はアジア各国の比較研究において重要な役割を果たしている。実際に、現在アジアブームの対象になっている国々において、日本に対する関心が以前と同様、またはそれ以上に高まっている。これは、日本から学び、日本との協力関係から利益を得たいという、彼らの姿勢の現れである。

さらに、アジアに対する関心を高めているのは、アジア地域の国々が経済的に発展したという事実だけでなく、アジアがその国々の発展に伴って、経済統合を進め、一つの重要な経済圏になったことである。今後は政治的にも統合されるかもしれないという将来展望がある。こうした背景から、今後は日本とアジアの政治・経済的なつながりがますます重要視されるだろう。将来のアジア地域の統合プロセスのなかで日本がどのような役割を果たすのかも、今後の重要な研究課題となるテーマだ。

一方、西欧諸国にとって“Japan still matters as Japan”ともいえる。その主な理由は、先進国と多くの問題を共有していることである。例えばエネルギー、環境、少子高齢化、経済と社会における格差の拡大等がある。中には高齢化や国家債務のように、日本のほうが問題が深刻化している分野もある。日本と他の先進国を比較する日本比較研究は、国家間の相互学習プロセスにおいて重要な掛け橋の機能を果たしている。

自らをそう見ていないことが多いかもしれないが、日本はアジアの重要な一員である。これはイギリスとヨーロッパの関係に似たものがある。そうした意味でも、アジアに対する関心は、日本研究に疑問を投げかけるものではなく、日本研究に補足的な新しい展望を付加している。こうした展望を研究分野で生かし、実り多いものにするためには、アジア各国の日本研究者との国際的な学術交流をより深めることが不可欠であると考え。また、大学教育レベルでもアジアの国々間の交流機会をさらに増やさなければならないという主張もあ

った。そのための方法として、ジョイント・ディグリーや欧州でみられる教育プログラム（ブローニャ・プロセス）の調整も考えられるだろう。

【コメント・討議】

（芳賀）アジア研究と日本研究はお互いに相反するものではなく、互いに関心と呼べるという話だった。

（野村）鳩山政権が「新しいアジア構想」を掲げている。日本研究は日本にフォーカスするが、日中韓の三カ国には相違点のみならず共通点も多い。経済だけでなく、政治面でも近しくなることが期待できる。

（モルティエニ／伊）報告者に同感。例えば、日本を知るためには中国の歴史を理解することはプラスになる。また中国の現代の発展を研究するために日本の経験を知っておくことは役立つ。ヨーロッパでは学生の就職を考えると選択肢を多くしておいた方がよい。例えば企業から見ると、日本と中国のどちらか一方というよりは、両国についてある程度理解している人材を採用したい。

（タンカ／印）インドにおける日本研究は小規模で、米国、欧州とのつながりも薄いのだが、過去10年間に日中印の研究者交流を国際交流基金が支援してくれた。インドのインド研究者と中国の中国研究者は互いに刺激になった。政治、経済、歴史、宗教、市民権、等について扱い、有意義だった。

（徐）アジアの中の日本研究の現状は変化している。例えば、韓国の学生が、中国に留学して中国語と日本語を学ぶ。中国人が韓国で日本研究を行う。そういったことがすでに行われている。中韓で日本に関する共同ゼミも行っている。今後は、中国、台湾、香港、韓国の域内院生シンポジウムを開催したい。

（楊曉捷）カナダでは、ブリティッシュ・コロンビア大学、トロント大学のような老舗の大学、およびカルガリー大学のような新しい大学の両方があり、どちらでも、日本語専攻はアジア専攻の一部になっている。学部生でも卒業までに日本語、中国語の両方を学ぶことを課されている。

（サボー）アジアと日本の関係は興味深い。アメリカにもアジア系の学生は多いと聞いているが、自分の大学にも、モンゴル系、中国系などの学生がいる。地元のさくら祭りで自国の文化を発表し、また漫画コスプレも行って、一体感を感じた。面白い感覚が生まれている。

(芳賀) 実際に行われている、アジア研究と日本研究の面白い協力関係がいろいろと見えてきた。日本の研究者や学生も、外国人研究者からの刺激を受けて、ぜひ打ち返すような感性と好奇心を持ってもらいたい。

セッション4：日本語と日本研究

【報告】李 康民 教授（韓国/漢陽大学）

世界的に日本語学習者が増加しており、これをいかに日本研究に結び付けていくか、また、日本語以外による日本研究をいかに評価するかという問題を検討した。

2006年において、日本語学習者数298万、日本語教育機関数13,600、日本語教師数44,000であった。1993年度と比較すると、学習者数140%増、機関数109%増、教師数136%増である。

シドニーで開催された日本語教育世界大会で、日本研究の媒介言語について事例紹介があった。カナダの大学（学部）ではほとんどの講義と教材に英語が使用され、大学院の場合は部分的に日本語原典を使用している。おそらく欧米では、日本研究であっても共通言語である英語を媒介として共通の基準に沿って研究が進められ、教授されている。

中国においては、日本語学習者数・高等教育における日本語学習者数ともに著しく増加しており、日本語と日本研究がうまくかみ合っている。日本語を媒介にした人材育成において、北京日本学研究中心の役割が大きかった旨報告された。また、他国を理解するキーワードとして従来政治及び経済が提示されてきたが、これに加えて文化も重要であり、これら3つが揃うことによって三輪車型の交流が可能という見解が表明された。

フランスにおいては、中国に対する関心の高まりが日本語学習に影響を与えているが、マンガ・アニメ・ゲーム等のポップカルチャーの浸透により大学の日本語学習者数が増えている。しかし、日本の政治・社会等に対する関心は低迷していると報告された。

英語圏とそれ以外の地域で状況は大きく異なる。ポップカルチャーの負の側面を大きく捉える必要はない。

韓国における日本のイメージは以下のように変容してきた。すなわち、「近くて遠い国」から、バブル後の「日本は『ない』(nothing)」へ。そのアンチテーゼとして「日本は『ある』」が提起された。そして、1996年ごろ以降は「日本は

面白い」となった。

現在は日本語を媒介としたネットワークが形成されつつあり（例：東南アジアの学生が中国南部に留学して日本研究を行ったり、韓国の学生が中国に行って日本研究について意見交換したり。共通言語は日本語。）、それを知らないのは日本人だけ、という状況もありうる。

【コメント・討議】

（野村）ジャーナリストは日本を相対化してみなければいけないといわれる。しかしこれは理念であって、日本語で日本人向けに発信される新聞記事を書いているので、実際にはできない。日本の内向き志向を変える鍵は何か？日本はなぜ変わることができないのか？

（バルデンベルガー）外向きの日本人もいるが、彼らは外国を鏡としてみている。「外国は日本をどのように見ているのか」と。

（アンダーソン）日本語と日本研究を考える際には、日本語だけでは不十分である。法律や社会についても知っていなければならない。

（テイラー）マンガやアニメは大衆向けの日本。全ての学生が日本研究者になるわけではない。また、今までの誘因（法律・経済等）では学生数を維持することができない。学生を一人前の日本研究者にするには10年を要する。

（徐）日本研究へのアプローチとしては、日本語を契機とする場合とディシプリンを契機とする場合がある。日本語を媒介しない日本研究、すなわち日本研究と日本語が乖離すると、研究成果が日本に反映されないのではないか、また、日本語の原典が読めなくて果たして日本研究者と呼ぶことができるのか、という懸念が生じる。従来、他国を理解するには政治と経済が両輪といわれてきたが、文化に対する理解も必要である。

（李）ポップカルチャーを現実として受け入れるべきである。学問とポップカルチャーを対立するものと捉えず、調和が必要である。また、ポップカルチャーの次は何か。これからの日本の価値を探す必要がある。

歴史認識は異なって当たり前。韓国内においても世代によって差がある。日中韓で合わせるのは不可能である。歴史認識の違いに接しつつ、適切に管理することが肝要である。

総括セッション：将来への課題

【報告】 Harald FUESS 教授（ヨーロッパ日本研究協会会長）

日本研究を支援する方策として、以下の点を挙げたい。

① 海外の日本研究者間の連携

ヨーロッパ日本研究協会は、3年に一度、約 600 名の研究者を集めて総会を開いている。これにならって、オリンピックのように4年に一度、日本研究者の世界総会を日本で開くことはできないか。日本研究の地域ネットワークが連合して開催し、基金の支援があればよいと思う。

また、ヨーロッパ日本研究協会では 18 ヶ月に一回、博士課程の学生によるワークショップを開いている。将来的には日本の財団等の支援を受けて日本他地域の学生も含めていきたい。

② 日本についての共同研究

同じ分野での共同研究がもっとあってもよい。

③ 教員交流

単純交換でない教員交流が盛んになればよい。ジョイント・ディグリーは、修士・博士課程については実績がある。始めるにあたってはシードマネーが必要だが、日本研究を支援する日本の財団の情報が少ないのが問題。

④ 研究環境の変化に伴う支援の変化

従来は図書館に図書を寄贈するのが一般的だったが、インターネットの発達に伴い、データベース等の活用や支援をすべき。

⑤ 歴史と将来

共同研究の礎となる個人研究の支援が大事。特に若手研究者への支援をお願いしたい。これは研究者育成のための投資である。現在、博士課程の学生のためのフェローシップはあるが、これに加えて博士課程修了者にもフェローシップを用意するなどの支援が考えられないか。

【コメント・討議】

(クライナー) 昭和 47 年にペンクラブ主催で世界日本研究サミットが開かれた。ぜひその第 2 回を実現してほしい。

若手の日本研究者育成にあたっては、日本政府に重い責任がある。政治主導で学術交流・文化交流を進めてほしい。国際交流基金の役割は大きい。

(野村) 政権が交代し、新しい枠組みで政策のプライオリティーを考えるよう

になったいまがチャンス。政府に国際交流基金のミッションを訴えるべき。IT時代なので、データベースや財団関連の情報を発信することも重要である。

(会場) ヨーロッパでも国を越えた日本研究ネットワークができつつある。例えば、2年前に行われたスピーチコンテストで2位に入ったのは、イギリスのダーラム大学で日本語と英語を学ぶスウェーデン人だった。エラスムス計画がこうした学生を生んでいる。日本国内でもバイリンガルで教える大学が増えている。

(芳賀) 例えばフランス文学研究のために米国に行くようなことがあってもよい。日本の若い学生であれば韓国に出たい。韓国を通して日本や中国について考えれば、視野が広がる。

(会場) グローバル化する中、外国で勉強する学生が抱えるアイデンティティの問題について、研究者の皆さんはどう考えるか。

(田中) ラテンアメリカで日本との関係を研究する際は、移民問題を扱うことが多い。

(会場) 日本に関する日本語文献は電子化されていないものが多い。マスコミの資料は利用できるが、アカデミックな資料で電子化されているものは少ない。日本のテレビも発信が少ない。海外でも民放が見られるようになるとよい。

(会場) 中国の雲南大学では、中国政府の奨学金を受けて、東南アジア（主にインドシナ諸国）からの修士課程学生を招へいし、日本または東アジアと東南アジアの関係に関する研究機会を与えているが、日本語の文献にインターネットを通じてアクセスすることが難しい。中国では機関誌・学術雑誌はインターネットで購読することができる。日本のテレビなどもインターネットで視聴できるようにしてほしい。

(会場) 北京電影学院でアニメを教えているが、反日ブームにのって反日思想を持つ学生とアニメで日本に興味を持つ学生の双方が多数存在する。中日友好のためアニメやソフトパワーは一つの手段として重要である。

(会場) 自分は日本のモダニズム文学を研究しているが、文学とは何か、文学の役割とは何か、文学の普遍性と独自性について考える。将来の日本研究のモデルは、2国間の相互研究から多国間研究に移っていくのではないか。例えばマンガを研究する場合、マンガは日本にとどまらず自国の文化にもなっている

ので、自国の文化を研究することにもなり、国の垣根が低くなると思う。

(フース) 箱根のフォーラムでは、普段接することのない分野・地域の研究者と知り合うことができ、よい勉強になった。これからも、より広い交流に努めたい。

(芳賀) 国際交流基金もこのネットワークを広げてほしい。

(野村) 日本研究・日本語研究がこのようにグローバルに進んでいることを知ることができてうれしい。日本人に希望を与えてくれる。

(芳賀) 昨年、源氏物語千年紀の研究会議座長を務めたが、世界の源氏物語研究者が日本語で源氏物語の読み方、翻訳の問題、歌と散文の関係、能への発展などについて語り合い、とても面白かった。源氏物語は日本だけでなく世界の古典。古典に立ちかえることが大事。日本人もこのことを自覚すべきで、外国人研究者の皆さんに教えられることは多い。

【終了挨拶】

(司会者) 今日お話があった若手の日本研究者支援には財源が必要だが、そのためには海外の日本研究に対する日本国民のご理解・ご支援が不可欠なので、よろしくお願い申し上げます。

以上